樺太および台湾の農業試験研究機関の活動から見る日本帝国外地の近代化

中山　大将

本報告の目的は、日本帝国外地であった樺太と台湾における農業試験研究機関の活動の比較を通して、近代帝国下の近代化と在地社会との関係を見ることである。具体的には、編成・人員、先住者・移住者との関係性、研究の方向性について比較することが課題である。

非西欧世界に近代をもたらしたのは帝国なのかという問いかけが本報告の背景にある。本報告では、〈近代化〉を (1) 国民国家主義、(2) 立憲法治主義、(3) 人権人道主義、(4) 資本主義および社会主義、(5) 科学主義が発展浸透する過程とする。本報告では〈在地社会〉には移住者も含める。

編成と人員に目を向けた時に、台湾に特有の事象として、(1) 先住者職員がいたこと、(2) 地方農事試験場が設置されていたこと、(3) 農事講習生制度により先住者人材の育成を図っていたことが挙げられる。(1) については、単に先住者人口が多かったからだけではなく、後述する農事講習生制度によりこれら人材を育成していたことがその背景として挙げられる。(2) については、領有時にすでに多数居住していた先住者農業者が台湾農政の対象であり、これらの人々への技術指導や優良種苗配布を施すためであると考えられる。(3) は、初等教育を終えた先住者を対象としており、単なる技術指導ではなく、中等教育程度の学科教育を施すとともに、日本帝国的価値観、つまりは日本帝国臣民としての心身の育成が図られていたことは着目に値する。ただし、こうした農業農村の各局面において〈既存人物から育成人物へ〉という流れは樺太や日本内地でも見られるものであり、外地特有の現象ではない。

先住者の農業に対する農業試験研究機関による評価は、樺太も台湾も低かった。しかしながら、近代農業に対する前近代農業の劣位性が論じられたのは、外地特有の現象ではなく、内地でも同様であった。

台湾の農事試験研究機関の成果として有名なもののひとつとして「台中 65 号」の開発と普及の〈成功〉がある。これは内地への移出米を生産し台湾農業を振興したい政策的意図と、現金収入によって経済的利益を増大させたい個々の農業経営者の意図とが合致した結果であった。台湾の農業試験研究機関の根本原理は農業近代化による台湾財政・経済への寄与であった。そのために、躊躇せず外来種の移植や在来種との交配を試みていった。このほか基本的な研究体制として、品種ごとに育種・施肥・防除が部門は違えど一組になった研究を行なうことで効率良く生産力向上を果たしていたことも特徴的である。

樺太においてはその気候条件から稲作の試験研究は断念され主食転換が図られた。樺太庁中央試験所の根本原理は近代的農業による拓殖への貢献であった。重要なのは

単なる農業開発ではなく、〈拓地殖民〉であるということである。農家食料の自給が重要な課題とされ、中央試験所は米に代わる主食作物の検討や開発、その普及に多くの労力を割いた。主畜従農であった残留露国人たちの農業は顧みられることは少なく、在来家畜はそもそも数が充分ではないため台湾のように交配を通じた新品種の普及は期待されず、内地からの移入と増殖が図られ最終的には在来種は1割未満にまで割合を減らす。中央試験所で特徴的なのは農家経営の内部まで配慮した技術体系の確立を目指していたことや、廃棄物の再利用など産業間連携も模索されていたことである。

台湾総督府中央研究所農業部で台中65号の開発に成功した技師の磯永吉にとって、日本人農業技術者によって近代化された農業が〈日本農業〉〈内地農業〉であり、〈内地化〉こそが成功の代名詞であったのに対して、樺太庁中央試験所の技師であり後に大政翼賛会樺太支部事務局長を務めることとなる菅原道太郎は、1930年代中盤から顕著になる樺太文化運動の中心人物のひとりであり、内地人の温帯的生活文化を亜寒帯に適応した亜寒帯文化へと発展させなければならないという主張を繰り返していた。誤解をおそれず単純化して言えば、〈国家〉〈民族〉が生存圏を拡大した結果生じる自然環境と従来の技術や生活文化との齟齬を、台湾の農業技術者たちは品種改良など〈自然〉を変えることによって、樺太では食生活など〈人間〉を変えることによって解決しようとしていたと言える。

樺太庁中央試験所が本格的に先住民族の〈伝統的〉技術に着目するようになったのは、1940年前後のことであった。樺太北部に生息するトナカイの産業化を「土人の保護」もかねて目論んだのであった。しかしながら、調査を始めてみると、先住民族の多くが市場経済に取り込まれ賃労働者化が進行しており、肝心のトナカイを手離し飼養技術も急速に失われつつあった。わずかに技術を残しているグループも先住民族ではありながら、大陸から移住して来た者たちであり、なおかつその中心的人物のウィノクーロフは常に洋装をするなど自分が〈近代化〉された人間であることを強調する企業家精神と政治的野心を持った人物であったことは興味深い事実である。

以上、台湾と樺太の農業試験研究機関の比較を通して以下のことが言えよう。第一に、先住者が大多数を占め社会環境的差異の大きい台湾での農業技術者の主な課題は生産力向上であり、内地との大きな質的差異があったと言えず、むしろ〈内地的外地〉と言われる樺太では自然環境的差異が著しく農業技術者は単なる生産力向上以上の課題に向き合わなければならなかった。第二に、台湾でも樺太でも農業試験研究機関の活動が完全に順調に在地社会に受容されたわけではなく、政策的合理性を前提とした農業技術者と経済的合理性を前提とした住民との齟齬が発生していた。

「非西欧世界に近代をもたらしたのは帝国なのか」という問いかけに対してシンポジウム内では充分に回答する時間がなかったので、簡潔ながらこの場を借りて回答を行なっておきたい。農業技術からこれら地域の近代化を眺めた時に、〈選択される近代〉という側面が見えてくる。いかなる国家権力も完全無欠な強制力を発動することは不可能である。農業技術の近代化の完全なる受容を強要することが困難であることは本報告の各事例が示している。台中65号が普及に〈成功〉し、樺太主食転換が〈成

功〉しなかったのは、技術を提供する側と受容する側の利害の一致の有無にほかならない。ただし、樺太の日本人移住者たちが中央試験所の提供する近代的技術全般を拒んでいたわけではなく、むしろ改良品種の配布を受けたり講習に招いたりと取捨選択を行なっていた。ウィノクーロフの北サハリン経由の移住を見れば、先住民族が必ずしも帝国の〈捕囚〉ではないことが理解できようし、樺太の在来の先住民族が労働市場に取り込まれ〈伝統的〉家畜や技術を失っていたのに対して、近代化された姿を常に演出していたウィノクーロフがそれらを維持しなおかつビジネスとして活用し、さらには民族国家樹立のための政治運動を展開していたことは、〈選択される近代〉を象徴していよう。気をつけておきたいのは、明治以降、日本人やその社会自体が日本政府による〈近代化〉の対象であった以上、外地の農業技術者にとっては日本人移住者も同様に〈近代化〉すべき対象であったことは言うまでもない。〈近代化〉とは在地社会の〈参加〉なくしては進展し得ない過程であることが今回の比較作業から見て取れるのではないか。

（なかやま　たいしょう：京都大学地域研究統合情報センター）